

ふるさと夕張

昨夏、久しぶりに夕張を訪れた。市の財政破綻以来すっかり知名度が上がってしまったが、中学まで暮らした故郷である。石炭を洗うために真っ黒だった川は清流となり、燻っていた「ずり山」には草木が茂っている。自宅のあった高台の炭住付近は、スキー場のリフト乗り場だ。しかし、それ以上に変わったのは街の空気だ。人々の活気がやはり感じられない。中心街のあちこちに掲げられた映画祭のカンバンも、どこか寂しげに見える。

もの心のついた頃、すでに石炭は斜陽産業への道を歩んでいた。労働運動が活発で、当時は「リストラ」という言葉はなく「合理化」反対と、デモ隊は叫んでいた。指名解雇も茶飯事で、肩たたきごっこが子どもの遊びになった。製鉄に欠かせない強粘結炭の有力産地であり、水力採炭や石炭の地下ガス化という先端技術にも取り組んでいたが、エネルギー革命の奔流には抗しようもなかった。再建の期待を担った新鉱はガス爆発に見舞われ、友人の父親など身近な知り合いも犠牲になった。炭鉱離職者はやまず、学校の休みが明ける度に同級生が転校したことを知るありさまだった。

夕張は自然のなかにあった。夏は昆虫採集に夢中になり、親戚のホワイトアスパラ畑を駆け、暮れると田んぼで蛍を追った。冬はスキー、スケートに浸っていた。そんな日常の中で、夏休みに連れて行ってもらった札幌は別世界だった。豊富な商品の並ぶデパートの玩具・文房具売場が眩しかった。いつしか、夕張を「脱出」することが子ども心に目標となっていた。

小・中学校時代の友人とは音信不通のままで、誰が夕張に残っているのかも判然としない。人口は9割減り、小学校舎は廃墟のまま放置され、中学校も統合で校名を変えている。同窓会行事など行われていないのであろう。

一時期、夕張は観光立市の優等生だった。石炭産業の遺産を観光資源に転用し、大規模リゾートを志向した。特産品のメロンは誰もが知る全国ブランドへと成長を遂げた。石炭城下町ではなくなったものの、らっ腕の市長が次々と繰

り出すビジョンに、市民が新たな街づくりの夢を託したことは容易に想像できる。石炭の穴を埋められる産業などない街で、行政が事業主体になることを市民は歓迎したのであろう。自治体に代わる事業主体が乏しいと往々にしてそうなる。三セクを含めると全国どこにでもある姿だ。

しかし、財政破綻により、市民の生活インフラがそれらの事業リスクの担保になっていたことに気づかされる。民間企業なら「撤退」で済むところだが、行政はそうはいかない。市民に課せられる負担は重い。市民税、固定資産税、下水道料金、保育料等の引上げと公共施設の閉鎖・縮小・・・市の政策を直接、間接に支持した結果責任であるとはいえ、まるで小さな行政の限界を試しているかのようだ。18年間の財政再建計画は始まったばかりだ。

夕張の再興を思うとき、夕張市農協の存在が浮かんでくる。それは、メロン生産と加工産業によって再度の街おこしをはかるという意味ではない。学びたいのは、夕張メロンを生み支えてきた組合員の「共助と自立」の姿勢である。市農協のメロン事業の歴史は苦難の連続だった。当初、生産者仲間には、作柄や品質が悪く営農継続が困難となる農家もよく出たそう。その際、組合員たちはお互いの資金を出し合い無利息で貸し付ける一方、技術指導を徹底して離農の危機を救ってきた。昨今では豊かな資金量を背景にすっかり忘れ去られている相互金融の原型がここにもあった。このブランドが「行政の温室」で育ったものではないという事実は示唆に富む。

今後とも行政の役割はあくまで土俵づくりであり、相撲をとるのは住民以外にはない。最近、市民によるボランティアやNPO活動などもさまざま報じられるようになり心強く思うが、市農協の「共助と自立」の精神と通底する力が一層発揮されることを願っている。

街を歩くと少年時代の断片的な思い出が鮮明に甦る。やはり夕張は私にとって特別な場所だ。これからも、遠くにありて故郷を思うことしかできないが、せめて「ふるさと納税」でつながりを感じられるなら、この制度も悪くないかと思えてくる。

(協同住宅ローン(株)代表取締役社長 堀田 充・ほったみつる)